様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８３６

研究課題名（和文）東寺蔵「弘法大師行状絵」の編纂論的研究

研究課題名（英文）Researches on the compilations of Kobo-Daishi's the conduct pictures in the Toji temple's possession

研究代表者
西　弥生（NISHI, YAYOI）

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：５０４５９９３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、東寺が所蔵する絵巻「弘法大師行状絵」の詞書について、①多くの部分が真言宗における重要文献からの抜粋記事に基づいて撰述されていること、②草稿本と比べて異同が散見されること、③先行して成立していた三系統の絵巻とも異同が多く見られることを明らかにし、これまで等閑視されてきた絵巻編纂の一連の流れを跡づけた。絵巻から派生的に版本・曼荼羅が生み出され、弘法大師伝の普及に東寺観智院が大きく貢献していた実態を跡づけた。

研究成果の概要（英文）：In this research, on the notes of Kobo-Daishi's the conduct pictures in the Toji temple's possession, a explanation of following three points of view is persuadable and it has traced the series of stream for the compilation of the picture scroll that has been neglected of streams until now.①Almost all of notes had been written based upon the extracted descriptions from the important literatures in the Shingon sect of Buddhism.②Differences are found here and there comparing with a rough draft notes.③Differences are found remarkably between the present three genealogical picture scroll and previous them.The printing books and the mandara charts had been produced derivatively from the picture scroll, and it also traced the actual condition that Kanchin (Toji) had made great contributions for the diffusion of a life of Kobo-Daishi.

研究分野：日本中世史

キーワード：弘法大師行状絵　編纂　東寺　空海　賢宝　版本　弘法大師行状曼荼羅　観智院

１．研究開始当初の背景

(1) 歴史学の分野において、編纂物の一種ともいえる絵巻物は、内容のもつ信憑性の観点から古文書・古記録に比して研究素材としての有効性は劣るとされてきた。そのため編纂物に関する体系的な研究は希薄であり、絵巻についても美術史や国文学などの分野では注目されてきた一方で、歴史学においては等閑視されてきた。しかしながら、編纂物の生成ということ自体も歴史的意味をもつのであり、歴史の「語られ方」を示すものとして軽視すべきではない。

また、数系統あることが判明している弘法大師伝絵巻の中でも、本研究において取り上げる東寺本「弘法大師行状絵」は集大成ともいうべき位置づけにある作品である。それにもかかわらず、本絵巻の詞書を詳細に分析し、編纂過程を体系的に明らかにした研究は皆無であるという研究史上の大きな問題があった。

(2) これまで、真言密教の事相・教相に基づく活動と諸寺院間の秩序の「実態」について研究を行ってきたが、その成果をふまえつつ、絵巻「弘法大師行状絵」に語られる真言宗の歴史をみると、少なからず違和感があることに気づいた。そこで、歴史の「叙述」がいかなる意図をもってなされたのか明らかにする必要性を認識するに至った。また、種々の絵巻のうち東寺本「弘法大師行状絵」は編纂過程を明らかにし得る稀有な絵巻であることにも気づいた。本絵巻はこれまで博物館展示にも出陳されて、研究者に限らず一般の人々の関心を集めてきた絵巻でもある。よって、本絵巻に関するこれまでの断片的な研究成果を体系的なものとし、社会にも還元していく必要性があると強く認識するに至った。

２．研究の目的

(1) 詞書の素材収集と活用の実態を解明すること

本研究で主に扱う東寺本「弘法大師行状絵」の詞書は、東寺の教相を主導したことでも著名な観智院賢宝によって撰述され、また詞書撰述に先立って収集された素材は「弘法大師行状要集」として類聚されていることが、新見康子氏「東寺所蔵『弘法大師行状絵』の制作過程―詞書の編纂を中心に―」（中野玄三氏他編『方法としての仏教文化史』勉誠出版、2010 年）によって明らかにされている。そこで、本研究では「弘法大師行状要集」と照らし合わせながら、詞書のどの部分がいかなる素材に基づいて撰述されているのかを分析することにした。

(2) 詞書の推敲実態を解明すること

醍醐寺には東寺本「弘法大師行状絵」の草稿本「弘法大師絵詞」が伝存している。東寺本「弘法大師行状絵」は 12 巻という大部に及ぶ絵巻であるが、醍醐寺の草稿本は全巻にわたる詞書の草稿としても極めて珍しく、編纂過程を語る決定的な史料の一つである。そこで本研究では、清書本と草稿本とを比較検討し、加筆修正が施された箇所の分析を通じて推敲の実態を明らかにすることにした。

(3)先行諸本に対する東寺本の独自性を解明すること

梅津次郎氏「弘法大師絵巻の諸本について」（御遠忌千百五十年記念出版会編『弘法大師行状絵巻』東京美術、1981 年）によれば、弘法大師伝絵巻は５系統に分類でき、東寺本「弘法大師行状絵」は第４系統に位置づけられることが指摘されている。そこで本研究では、東寺本に先行して成立した３つの系統の弘法大師伝絵巻の詞書と内容・表現等を比較分析し、東寺本の特徴や独自性を明らかにすることにした。

３．研究の方法

(1) 素材集「弘法大師行状要集」と詞書との突き合わせ

東寺本「弘法大師行状絵」の詞書を撰述した東寺観智院賢宝は、それに先立って収集した素材を類聚して「弘法大師行状要集」（「東寺観智院金剛蔵聖教」300 箱１号）を編纂したことが先学によって指摘されている。そこで、この「弘法大師行状要集」全６巻と詞書とを突き合わせ、詞書のどの部分がいかなる素材に基づいて撰述されているのか分析した。

また、素材と詞書との突き合わせに際しては、文章中に見られるキーワードやキーセンテンスに注目し、素材とされた文献が絵巻としてふさわしい表現にいかに整えられているのかについても確認を行った。

拙稿「東寺蔵「弘法大師行状絵」の詞書―観智院賢宝の撰述意図―」（『佛教史學研究』投稿中）では、巻 11 第 1 段に関してのみ素材と詞書との対応表を掲げたが、本研究では全巻にわたって対応関係を検討した。

(2) 草稿本「弘法大師絵詞」と詞書との突き合わせ

東寺本「弘法大師行状絵」は先行する弘法大師伝絵巻を質量ともに凌駕し、全 12 巻という充実した内容をもつ絵巻であることから、推敲も一度ならず何度か重ねられたことが想定される。詞書の部分的な草稿は東寺にも現存するが、全巻分の草稿は管見の限りでは醍醐寺蔵「弘法大師絵詞」のみである。

そこで本研究では、清書本と醍醐寺に伝存する草稿本とを比較して加筆修正箇所を分析し、全巻にわたって推敲実態を明らかにすることを目指した。その際、特に記事の配列、

内容や表現上の修正、登場人物の異同およびその名称表記などに注目し、加筆修正の理由についても検討を行った。

(3) ３系統の先行諸本との突き合わせ
東寺本「弘法大師行状絵」に先行して成立した第１系統「高祖大師秘密縁起絵」・第３系統「高野大師行状図画」10 巻本の詞書との突き合わせを行い、全体の構成および各巻の記述内容・文章表現上の相違点や、登場人物の異同、名称表記の違い等について分析することで、弘法大師伝絵巻の集大成とされる第 4 系統「弘法大師行状絵」（東寺本）の独自性を明らかにするとともに、いかなる意図に基づいて東寺本の詞書編纂がなされたのかを考察した。

４．研究成果

(1)詞書の素材の判明

東寺観智院賢宝が絵巻「弘法大師行状絵」の詞書を撰述するに先立って編纂した、詞書の素材集ともいうべき「弘法大師行状要集」の内容を検討した結果、詞書の多くの部分について、いかなる素材がどのように用いられているかを明らかにすることができた。
「弘法大師行状絵」の詞書は、様々な文献から抜粋した記述を組み合わせ、詞書としてふさわしい表現に整える、という方法によって編纂されている。こうした方法によって編纂されたものであるため、弘法大師空海の生涯における様々な事象を時系列に見ていくと、必ずしも正確ではないと思われる箇所や、文脈上の違和感が見られることに気づいた。

(2)草稿本と清書本の異同の判明

醍醐寺には、東寺本「弘法大師行状絵」の草稿本「弘法大師絵詞」が伝存している。「弘法大師行状絵」の詞書と、この草稿本とを突き合わせる作業を行った結果、記述の追加・削除・修正などによる内容の異同が全巻にわたって散見されることがわかり、賢宝による推敲の痕跡を見出すことができた。具体的には、平仮名から漢字表記への書き換えやその逆のパターン、語句単位での表現の異同が見られるだけでなく、清書本にない一節が草稿本にはあるといった異同例が確認できた。これらの異同例は、絵巻の編纂意図にもかかわる重要な情報となる。
なお、「弘法大師行状絵」は、大部にわたる絵巻であるため、醍醐寺に伝存する草稿本のみならず、何段階かに及ぶ草稿の作成を経て、清書本が完成したと考えられる。

(3)先行諸本との異同の判明

東寺本「弘法大師行状絵」に先立って成立した三つの系統の弘法大師伝絵巻（「弘法大師秘密縁起絵」・「高野大師行状図画」六巻本・「同」十巻本）との比較を行った結果、内容に少なからず異同があることがわかった。このことは、同じ弘法大師伝絵巻ではあるが、制作目的や想定する読者層の違いがあることを示唆している。
このことについては、先行諸本それぞれの成立背景を明らかにした上で、再検討する必要があるため、今後の課題として残すこととなった。

（4）絵巻から派生して生まれた媒体について

絵巻「弘法大師行状絵」から派生して、江戸時代には版本が、また明治時代には「弘法大師行状曼荼羅」が新たに生み出され、弘法大師伝の広まりに重要な役割を果たしていることに気づいた。
そこで、当初の研究計画にはなかったが、絵巻・版本・曼荼羅という三つの媒体を総合的にとらえることにした。そして、絵巻が成立した南北朝時代にとどまらず、中世から近現代にかけての長い時代の流れの中で、弘法大師伝という情報体系がいかに作り上げられていったのか、編纂論という枠組みを超えて、情報史という観点から跡づけを行った。

(5)媒体の派生をおし進めた主体について

絵巻「弘法大師行状絵」を編纂するにあたり、空海に関する様々な書物の中から絵巻に必要な部分を抽出し、詞書を撰述したのは観智院院主であった。その後も標題作成や版本刊行、曼荼羅の生成というように、観智院院主は庶民も視野に入れて弘法大師伝の普及を進めたのであり、情報の「発掘」・「統合化」・「普及」者としての観智院院主の貢献は大きいことが明らかになった。
「一宗の勧学院」とも呼ばれ、真言宗の教学拠点として知られる観智院であるが、修学面だけでなく信仰拡大の面でも重要な役割を果たしていたことが分かった。

(6)弘法大師伝の広まりについて

絵巻「弘法大師行状絵」は京都で生まれ、京都を主とする限られた範囲での受容であったのに対し、版本・曼荼羅という新たな媒体が派生的に生み出されたことにより弘法大師伝の普及は格段に進み、地方寺院の間にも広まったことが分かった。
江戸時代には四国巡礼が大衆化し、こうした社会的状況は弘法大師伝の普及へと東寺を突き動かす一つの原動力となったと考えられる。絵巻の内容が、版本という媒体を通じて庶民にも知られるようになり、庶民の視点から新たな内容が付加されて曼荼羅が成立したと考えられる。版本・曼荼羅の詳細についての検討は、今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 西弥生、弘法大師伝を語る媒体―絵巻・版本・曼荼羅に注目して―、史学、査読有、第 87 巻第 3 号、2018、pp.1-32

② 西弥生、東寺一門像の形成過程―「東要記」を中心に―、日本歴史、査読有、第 833 号、2017、pp.18-37

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計２件）
① 西弥生他、勉誠出版、古文書料紙論叢、2017、pp.595-614

② 西弥生他、竹林舎、生活と文化の歴史学シリーズ 学芸と文芸、2016、pp.351-382

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
西　弥生（NISHI, Yayoi）
日本女子大学・文学部・研究員
研究者番号：50459939

(2)研究分担者　なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者　なし
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者　なし
（　　）